出版ダイジェスト

社団法人　出版梓会　出版ダイジェスト社　http://www.digest-pub.net
毎月３回（１日・11日・21日）発行　購読料１ヵ年＝送料共1,575円（税込）　郵便振替 00190-3-95516
〒101-0052　東京都千代田区神田小川町3-28-13 ラフィネお茶の水805　電話03-3292-2323　FAX 03-3292-2325

白水社の本棚

No.157　2011年 夏号（5･6･7月ごろの新刊案内／読み物／お知らせ）

好評連載（7面）■「山姥の辞書」小池昌代　■「「知的生産」のための術語集」鎌田浩毅　■「中国を読む」城山英巳

〒101-0052 東京都千代田区神田小川町3-24／tel.03-3291-7811／http://www.hakusuisha.co.jp

front page essay

松井 周　第55回岸田國士戯曲賞受賞

「虚構」と「現実」の世界で

劇団サンプル「自慢の息子」（2010年、於：アトリエヘリコプター）撮影：青木司

岸田國士戯曲賞を受賞してから十一日後に東日本大震災が起きて、受賞時に何を考えていたかはすっかり忘れてしまいました。きっとたいしたことは考えていなかったように思います。昨日とあまり変わらない明日が来るだろうという予測の中で日々を過ごし、その「変わらなさ」の中でゆっくりと日本という国が失速していくというイメージに沿って、それまで僕は作品を作っていたと言えるかもしれません。しかし、この震災後にもはや「変わらなさ」をもとに作品を作るのは難しいです。変わってしまった世界に向けてどのように作品を作るのか、あるいは演劇はそんな世界にどのように有効かを考えるしかありません。

作品については現在製作中であり、作品を体験していただくしかないので多くを語れません。そこで、演劇はいかに有効かということについて書いてみたいと思います。しかし、このような問いの立て方はどうしても息が詰まるようなところがあります。実際、今ここまで書いてきて、少し堅苦しくなってきた気がしています。視野を狭めるばかりだと感じるようになりました。だから、最近はもう少し肩の力を抜いて考えるようにしています。

まず、演劇の一つの効果として、ある一つの空間に集まった観客が、筋書きのある虚構でありながら、現実にそこで俳優が何かを行っているという演劇作品を味わうことで、身体や精神に溜まった凝りをほぐすということは言えるだろうと考えています。つまり、演劇を「虚構」と「現実」の混ざり合った、いわば「間」の表現と考えるわけです。劇場空間は言ってみれば緩衝地帯です。観客はその場所で作品を味わいながら、自分の中の妄想や偏見の飼い慣らし方を考えたり、もしくは、日常生活への適応の仕方などを準備し、ぼんやりできるという演劇の在り方です。観客はそこで独りになって考えることもできるし、あるいは皆につられて笑うこともできるでしょう。だから、集会所の機能もあるように思います。

ただ、最近思うのは、もう一方で、観劇という形を取らなくても、誰もがいつでもどこでも演劇的な経験を味わっているとも思うのです。演劇的な経験とは先述したように「虚構」と「現実」が混ざり合ったような経験です。私たちは、日常においても、そのような経験を頻繁に繰り返しています。

雲の形を見て人の顔や食べ物を思い浮かべたり、幽霊を怖がったり、神様を信じたり、セミの声や懐かしい歌が子供の頃の記憶を呼び覚ましたり、デジャヴのような経験をしたり、運命を呪ってみたり。そのような経験をしているとき、私たちは「現実」に何かしらの「虚構」を貼り付けていくような作業をしていると思います。事実そのものに各個人の思い込みを投影するという意味です。もちろん「虚構」と呼べるほどの確固とした物語性を伴ったものではないかもしれません。しかし、少なくとも「虚構」の芽です。その芽は私たち自身によって作り出されるのではないでしょうか。何故なら私たちは「現実」を「虚構」化してしまうフィルターだからです。

言い方を変えると、人間はいつだって演劇的だということです。私たちは圧倒的な迫力の「現実」を体験しながらも、どこかでそこから半身をずらすようにして「虚構」の回路を開き、どちらも混ぜ合わせ二重化することで、時には自らを鼓舞し、時には防衛するような存在なのだと思います。

で、僕としてはこの人間に備わっている、言わば「演劇力」をもっと楽しめないものかと思うのです。劇場やどこかのスペースで作品を鑑賞するという形ではなく、演劇的経験を楽しむイベントのようなものがもっと気軽にできないものかと。

真っ先に浮かぶのがコスプレのようなものです。自分が何か別のキャラクターの衣装を着ることによって、別世界の人生を生きるかのように振る舞うことはきっと楽しいと思います。素の自分と別世界の住人である自分を行ったり来たりすることは、堅苦しくない演劇経験だと思います。

もしくは、人間でないものを着せ替えるという方法もあるかもしれません。机とかタンスなどに何か衣装を被せて、その一生を思い浮かべるのです。何も人間の服を着せることはないでしょう（もちろんそれもありですが）。埃を降らしたり、落書きを書いたり、幾つかの傷をつけるだけでも、机の物語が出来上がるかもしれません。参加者が思い思いの机像を机に貼り付けるのです。貼り付けながら私たちは鑑賞もします。鑑賞した後、それを燃やすか分解します。机が生まれてから解体されるまでに、どれだけの人が肘を突き、ペンを走らせ、居眠りをしたのか。そんなことに思いを馳せるかもしれません。ニセの歴史が机に貼り付けられます。

わざわざニセの歴史をでっち上げるのではなく、ありのままの机から本当の歴史を想像すればいいじゃないかという意見もあるかと思います。もちろん、それでもいいと思います。しかし、その本当の歴史を背負った机をニセの歴史の机と並べる方が、よりスリリングな演劇体験を生むのではないでしょうか。何故ならその時二つの机を鑑賞する私たちは、どっちの歴史もより本当らしいとすれば、事実を虚構化し、虚構を事実化するような経験をせざるを得ないからです。すなわち、本当の歴史って何？という疑問を持つわけです。

私たちが「虚構」と「現実」の重なり合った世界で翻弄され続ける存在だということを知るのは、楽しくもあり恐ろしくもあります。いつ自分が、その浅瀬のようでいて、実は底なしの世界に対して判断停止を起こすかわからないからです。けれど、震災以後、その矛盾を抱えて生きなくてはならないことは決定的になったように思うので、「演劇力」を味わうイベントをこれから少しずつ仕掛けていきたいと、最近の僕は思っています。

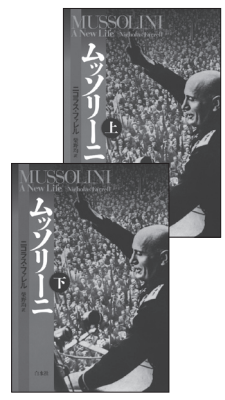
◇まつい・しゅう＝一九七二年、東京都出身。劇作家、演出家、俳優。劇団「サンプル」主宰。一九九六年に劇団「青年団」に入団、二〇〇七年独立。二〇一一年に『自慢の息子』（二〇一〇年上演）で第五十五回岸田國士戯曲賞受賞。

愛書狂

知り合いの古本屋さんの話では、三・一一以後、客からの買い取りが目立って増えたという。東京でも、二階以上に本を置く家では、蔵書に被害があったようだ。災害は、わが本棚と向き合い、蔵書のあり方と処分を考えるきっかけとなる▼一九九五年一月十七日、阪神淡路を襲った震度七も、愛書家が所蔵する本をなぎたおし、焼きつくした。蔵書十三万冊と言われる本の虫・谷沢永一宅も、書庫の二階は本棚がすべて将棋倒しになった。本は床に散乱し、主は途方に暮れた。そのことを新聞に書いたところ、司馬遼太郎から速達が届いた▼修復は人まかせにして、暖かくなってから、自分で整理し直した方がいい。冬期、谷沢の身を案じた真情あふれる手紙に、本の虫はいたく感激し、助言にしたがった。本棚とは、単に本を並べればいい、というわけではない。自分の読書傾向、趣味嗜好、思想が色濃く反映する。「創作」と言ってもよい▼クラフト・エヴィング商會による新刊『おかしな本棚』（朝日新聞出版）は、まさしく、本棚が「創作」であることを知らせる傑作だ。吉田浩美・篤弘が、本棚からテーマ別に本を抜き出して並べ、黒バックで撮影した写真にエッセイを付す▼「森の奥の本棚」「旅する本棚」など、セレクトされることで、本が新たな意味を持つ。「ただひとつだけの本棚」は、『十字軍』『都市』『時間』など表題が単語一つの岩波新書がずらり並ぶ。その数、五十一冊。ところどころ色褪せた背が、諧調を作り、横並びのタイトルは詩のようだ。本棚は呼吸し、そして自ら雄弁に語る。（野）

ムッソリーニ（上・下）

ニコラス・ファレル［著］



群衆を駆り立てたムッソリーニ神話の真実

ヒトラーとともに今日、「史上最悪の人物」として記憶される独裁者ムッソリーニ。しかし、同時代に彼ほど積極的に論じられ、好意的に評価された人物はいなかった。ヴァティカンとイタリアを和解させ、暴走するヒトラーを絶えず牽制するその姿に、世界中が熱狂したのだ。

チャーチルは彼を「ローマの天才」と呼んだし、教皇ピウス十一世はイタリアを救うために「神に遣わされた」人物と讃える。あのヒトラーが彼の熱烈な模倣者として歴史に登場したことも忘れられない事実だ。

本書は、ムッソリーニをこうした同時代に改めて「埋葬」する試みである。第二インターの崩壊から、ローマ進軍、エチオピア侵攻、スペイン内戦、第二次大戦、そして謎に包まれた処刑まで……その生涯から見えてくるのは、イタリアの「栄光の日々」と、彼に対する「イタリア人の愛」である。

もちろん、挑発的な解釈は現代にも跳ね返る。「ファシストの宗教にイタリア人が与えた合意は、信頼と理性から発したものだった」。本書がこう強調するとき、それは自由主義やマルクス主義を中心とした既成の歴史観への疑義の表明だ。

著者は元デイリー・テレグラフ紙記者。歴史修正主義論争を経たのちに〈物語〉を正面から論じた異色作！

◇柴野均訳　各四六判　上・四七二頁＋口絵八頁　下・四五二頁＋口絵八頁　各定価三九九〇円（各本体三八〇〇円）

（上）ISBN978-4-560-08141-9（下）ISBN978-4-560-08142-6

ヒトラーの最期

ソ連軍女性通訳の回想

エレーナ・ルジェフスカヤ［著］

独裁者の顎骨をめぐる意外な真相とは?

著者はドイツ語の戦時通訳として、一九四二年からソ連軍に従軍し、四五年五月のベルリン陥落後は、総統官邸地下壕でヒトラーの死体探索に加わった。後日、ヒトラーの顎骨の入った箱を預かった彼女は、スターリンの政治的思惑に翻弄されることになる……。本書は復員後、作家となった著者による、まさに「戦争のカオス」を描いた貴重な回想録だ。

本書に描かれるのは、勇ましい軍人や戦闘の話ではない。避難民、最前線へ向かう兵士の足取り、戦地で宿泊した農家の家族、解放されたポーランドでの見聞、ナチ収容所から解放されたユダヤ人、連合軍捕虜、娘と兵士との恋、赤軍内部の雰囲気や微妙な変化、戦時中のほうが戦前、戦後より人間関係が自由で正直だった、という感想など、どれも興味深い。しかも、著者の視線は明らかに男性とは異なり、美化されていない「戦争の日常」を見つめ、生々しく描いている。さらに、捕虜の尋問に立ち会い、ドイツ軍兵士の手帳や私信に触れることもできたため、戦争を敵側から見ることができたことも重要だろう。

著者らが発見したゲッベルスの日記やボルマンの手記、さらに戦後のジューコフ元帥との会見を通じて、「ヒトラーの最期」の真相に迫ってゆく叙述は、本書の白眉である。

◇松本幸重訳　四六判　五五六頁＋口絵四頁　定価四二〇〇円（本体四〇〇〇円）

ISBN978-4-560-08134-1

ノルマンディー上陸作戦1944（上・下）

アントニー・ビーヴァー［著］

「戦争の実態」を圧巻の臨場感で再現！

本書は、上は国家元首や各国の将軍から、下は前線兵士や一般市民まで、第二次大戦を体験した様々な人びとの回想・証言・手紙など、近年明らかにされた最新史料を縦横に駆使して、連合軍が「大西洋の壁」を突破し、ヨーロッパ北西部を進軍、ついに「パリ解放」に至るまで、「史上最大の作戦」と各戦線の全貌を描いた、戦史ノンフィクション決定版だ。

冒頭は、情報戦でドイツ軍を圧倒し、事前掃海、偵察行、欺瞞作戦はじめ、上陸地や日時の決定、チャーチル、アイゼンハワー、ド・ゴールなどの人間模様、各将官たちの反目、野心、思惑が描かれる。そして、侵攻に対するドイツ軍の備えや組織上の混乱、フランス国内のレジスタンス各派の動向と活躍が述べられる。いよいよ戦闘が始まる章では、先遣隊ともいうべき空挺部隊による急襲作戦の苦闘、投降しようが敵兵は皆殺しという修羅場、無敵艦隊の海峡横断、血みどろの上陸作戦が繰り広げられ、各海岸での戦闘が凄まじい。そしてパリに向かう道程における各都市での命がけの攻防、「死の回廊」ファレーズ、パリ蜂起と先陣争い、最終章で歓喜のパリ解放へと至る……。本書はまさに「戦争の実態」の混沌と多様を、巧みな語り口で活写し、息をのむ怒濤の展開に、頁を繰るのがもどかしい。◇平賀秀明訳　各四六判　上・五二〇頁＋口絵一六頁　下・五〇〇頁＋口絵八頁　各定価三一五〇円（各本体三〇〇〇円）7月下旬刊

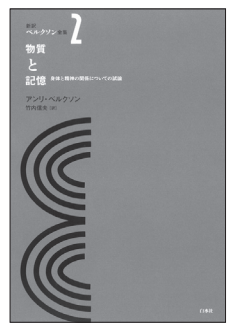
（上）ISBN978-4-560-08154-9（下）ISBN978-4-560-08155-6

【新訳ベルクソン全集】第2巻

物質と記憶

身体と精神の関係についての試論

アンリ・ベルクソン［著］



ほんとうの主著を完全新訳！

イマージュではなく、イメージ。

今回の新訳では、従来イマージュと訳されてきたimageがイメージと訳されている。知覚された物であると同時に、それ自体で身体の外部に在る物のことだ。

はたして、「イメージする」とはどういうことか？　今回、はじめて書名に付されることとなった副題からも明らかであるように、「身体と精神の関係についての試論」として詳らかにされてゆく。そしてまた、そこでベルクソンが着目した持続的な物こそが、「記憶」という存在であった。

イメージを想起する「精神」と、イメージの群れとしての「物質」を、それぞれ実在するものとして肯定してゆく――心身二元論を深化させ、心身合一への展望を語るベルクソンの、精度をきわめた「経験主義」が堪能できる。現象学や脳科学などに影響を及ぼした本書は、科学と哲学を統合するベルクソンの、ほんとうの主著。

ベルクソンならではの思考の動きを、逐語訳ではなく、可能なかぎりわかりやすい日本語で捉えるための完全新訳！　前田英樹氏による解題、茂木健一郎氏によるエッセイ、しりあがり寿氏による漫画をおさめた月報つき。

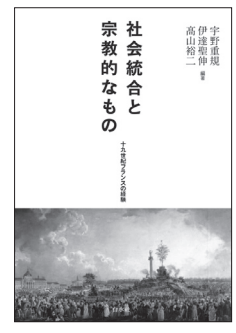
◇竹内信夫訳　四六判　三七〇頁　定価三三六〇円（本体三二〇〇円）7月下旬刊

ISBN978-4-560-09302-3

社会統合と宗教的なもの

十九世紀フランスの経験

宇野重規、伊達聖伸、髙山裕二［編著］



「信じること」の根拠は？

「もし神が存在しないなら、それを発明する必要がある」

一七九四年、キリスト教の神に代わる「最高存在」の祭典を主宰したロベスピエールが語ったとされる言葉だ。一方、「人民史家」と呼ばれたミシュレは大著『フランス革命史』で「革命はかつて宗教であった」と記している。

あらゆる権威が解体したポスト革命期の十九世紀フランス。そこに幻出したのは、まさに〈神々のラッシュアワー〉状況だった。

世紀前半は、新キリスト教やサン＝シモン教、人類教はじめ、キリスト教に対抗する新たな制度宗教が雨後の筍のごとく現れ、後半には共和国の権威の源泉を人間の内面に求めた「人格崇拝」が支配的になる。

本書は、こうした十九世紀フランス思想史の展開から社会的紐帯の意味をあらためて問い直す試みである。宗教（religion）の語源は、ラテン語の「再び結びつける」（religare）にあるとされるが、宗教のこの位相に着目したとき、「信じること」の根拠を追い求めたひとつの時代が鮮やかに浮かび上がってくる。

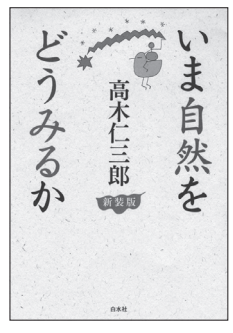
政治と宗教をつなぐ新たな思想地図を提示することを目指した、東京大社会科学研究所の宇野重規教授を中心とした共同研究の最新成果！

◇四六判　二六七頁　定価二七三〇円（本体二六〇〇円）7月下旬刊

ISBN978-4-560-08149-5

いま自然をどうみるか【新装版】

高木仁三郎［著］



各紙誌絶讃の記念碑的名著

原子力資料情報室代表であった故高木氏が「自然とは何か」という重い問いに真正面から取り組み、自由と解放の自然観へと思索の歩みを進めたのが本書である。

ギリシア以降現在に至る自然観を追うことによって著者は、人間にとっての自然が感性的・有機的な自然と、合理的・無機的な自然とに引き裂かれてしまったとみる。後者において人間は自然を支配したかのような錯覚に陥り、自然に対して傲慢にふるまってきた。進歩・科学の名により正当化されるこうした人間中心主義の自然観からの一大転換が必要と考える著者は、単なる科学批判ではなく、民衆にとっての労働・生活の観点を加えながら、現代の危機的状況を超える具体的な道を探ってゆく。

3・11フクシマの惨事を体験してしまった私たちにとって、自然と人間の関係の立て直しは焦眉の急の課題となった。このとき人の内なる自然に根ざした生き方を志向する著者の根源的な自然論は、まさに得難い指針となるだろう。「本書で強く心をひかれたのは、進化を様々な生の相互作用がもたらす熟成とみる考え方だった。……その点で高木氏ほどラディカルな地点に到達しているエコロジストは世界にも稀である」（関曠野）。多数の紙誌から絶讃された記念碑的名著。◇四六判　二九二頁　定価二一〇〇円（本体二〇〇〇円）

ISBN978-4-560-08156-3

【エクス・リブリス】

イルストラード

ミゲル・シフーコ［作］

二〇〇二年二月、ニューヨークで活動を続けてきたフィリピン人亡命作家クリスピンが、ハドソン川にて死体で見つかった。彼の書斎からは、近代フィリピンを牛耳ってきた歴代の富と権力の内情を暴いた、執筆中の小説の原稿が消えていた。クリスピンの若き教え子ミゲルは、死の真相を解明すべく、母国フィリピンへと旅立つ。師の足跡を追って奔走するミゲルだが、頻発する反政府デモ、テロ、停電、大洪水など事件や惨事がつぎつぎに起こり、師の知人たちとの会見も難航する。やがて師の人生を追うことの本当の意味に気づいたミゲルは、迷宮を抜けだす道を求めて、離島へ向かう……。

《マン・アジアン文学賞》受賞作品

フィリピン独立運動に関わったクリスピンの曾祖父から連なる近代百五十年、四世代の家族の歴史をたどった物語が中心となり、犯罪小説、青春小説、インターネットや新聞記事など、多様なジャンルの断片が散りばめられる。タイトルは「知識人たち」という意味のスペイン語で、フィリピン独立の革命精神を支えた人びとを指す。

ミゲルが探索の果てに辿りついた驚くべき「真実」とは？　フィリピン系新世代作家が放つ鮮烈のデビュー傑作長篇！

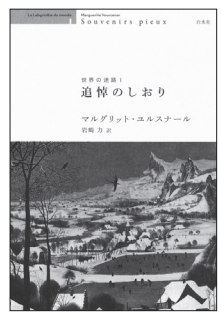
◇中野学而訳　四六判　四五八頁　定価三一五〇円（本体三〇〇〇円）

ISBN978-4-560-09016-9

【世界の迷路 I】

追悼のしおり

マルグリット・ユルスナール［著］



「私が私と呼ぶ存在は、一九〇三年六月八日月曜日の朝八時ごろ、ブリュッセルで生まれた」（本文冒頭より）

代表作『ハドリアヌス帝の回想』『黒の過程』などで知られ、女性で初めてアカデミー・フランセーズ会員に選出されたベルギー出身のフランスの作家マルグリット・ユルスナール。第二次大戦を機にアメリカの最果ての島へ渡り、自身の作品の英訳者であり、また生涯の伴侶でもあった女性とともに、パリの文壇とは距離をとりながらひっそりと暮らしていた孤高の作家でもあった。

自伝的三部作、遂に刊行開始

本書は、著者が約二十年を費やした、母・父・私をめぐる自伝的三部作〈世界の迷路〉の第一巻。原題のSouvenirs pieux（敬虔な思い出）は、聖書の一節などを添えて印刷された、近親者の死を告げる小さなカードのこと。語り手は、出産後わずか十一日でこの世を去った母と、その一族の生（と死）の軌跡を、透徹した筆で精緻に辿りながら、〈私〉へとつながる細い糸を手繰り寄せていく。ある家族の物語は、やがて「古いヨーロッパの一小国の歴史を開く窓」となり、我々を広大な時間の旅へと導くだろう。

◇岩崎力訳　四六判　三七四頁　定価三七八〇円（本体三六〇〇円）

■【世界の迷路】続刊

Ⅱ『北の古文書』小倉孝誠訳（二〇一一年冬刊行予定）

Ⅲ『何が？　永遠が』堀江敏幸訳（二〇一二年刊行予定）

ISBN978-4-560-08135-8

低開発の記憶

エドムンド・デスノエス［作］

革命直後の変わりゆくハバナの姿を鮮烈な映像によって捉えた映画「低開発の記憶」（一九六八）は、ラテンアメリカ映画史における不朽の名作として知られる。本書はこの映画の下敷きとなった同名小説である。

舞台は、革命が成功して間もないハバナ。カストロの社会主義宣言によって、キューバ人資産家たちは次々とアメリカに亡命。語り手「僕」は、妻ラウラや両親、友人が当然のように出国するなか、ハバナに残る決意をする。祖国の運命を目撃するため、そして煩わしい家族から解放され、念願の小説を書くためだ。

今なお輝きを放つ、キューバの記憶を辿る名作

「僕」は街を歩き、人々を観察し、偶然出会った女優志望の少女エレーナと関係を持つ。キューバ同様「低開発」な彼女を、かつて妻にしたように教育しようとするがうまくいかない。挙句の果てに、未成年者に淫行を働いたかどで訴えられるという憂き目に遭う。

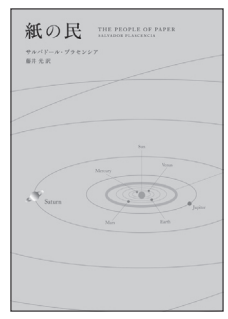
目撃者／傍観者として生きる語り手の目を通して、当時の社会と人々の姿が批評的に、時にユーモラスに綴られる。キューバ革命からおよそ半世紀が経つが、本書の魅力は今も色褪せない。なお本書が初めて日本で紹介されたのは、英訳を元にした小田実訳『いやし難い記憶』（一九七二）。今回の新訳は、三つの短編が付されたキューバ版に拠る。

◇野谷文昭訳　四六判　一九六頁　定価二一〇〇円（本体二〇〇〇円）

ISBN978-4-560-08132-7

紙の民

サルバドール・プラセンシア［作］



二〇一〇年、アメリカの文芸誌が選んだ「世界で最も独創的な作家五十人」に、トマス・ピンチョンや村上春樹らとともに名を連ねたメキシコ出身の作家サルバドール・プラセンシアによる傑作デビュー長篇。

小説は、一見メキシコ移民の物語として始まる。妻に捨てられたフェデリコ・デ・ラ・フェは、悲しみを抱えながら一人娘を連れて国境を越え、ロサンゼルス郊外の町エルモンテに落ち着く。ある日、自分たちを上空から眺めている〈土星〉＝作者サルバドール・プラセンシアの存在に気づいた彼は、他の移民たちと団結して、自由意志を守るために〈土星〉を相手取って戦いを始めるが……。

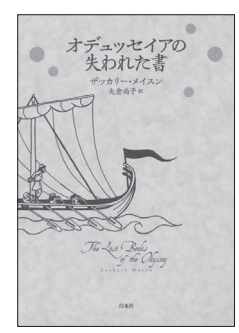
悲しみに続編は存在しない

〈土星〉が見下ろす世界には、「紙の民」の末裔メルセド・デ・パペル、メキシコの伝説的プロレスラーにして聖人のサントス、メキシコ生まれという設定のリタ・ヘイワース、史上初の折り紙外科医など、虚実入り混じるさまざまな登場人物がひしめき合う。彼らの「声」や「意識」を再現したテクストの自由奔放なレイアウトと飽くなき実験性、作者自身を取り込む語りというメタフィクション的仕掛けが交錯し、唯一無二の世界を作り上げている。「これだけ奇妙奇天烈で、これだけ悲しく、これだけ笑える小説が他にあったら教えてほしい」（柴田元幸氏）◇藤井光訳　菊判　二八〇頁　定価三五七〇円（本体三四〇〇円）7月下旬刊

ISBN978-4-560-08151-8

オデュッセイアの失われた書

ザッカリー・メイスン［作］



ホメロスの作とされる傑作叙事詩『オデュッセイア』は、英雄オデュッセウスがトロイア戦争から帰国するまでの冒険の旅を詠ったもので、当時の伝承の数々をとりこんでつくられたと見られている。とすれば当然、採用されなかった話や別バージョンもあったことだろう――そこから本書は始まる。

ホメロスの詠ったイタケの王オデュッセウスは、女神アテナの寵愛あつく知略で知られ、トロイア戦争では巨大な木馬を使ってギリシア軍を勝利に導いた。だが、船で帰国する途中、海神ポセイドンの怒りをかい、何年も海上をさまようはめになる。美しい歌で船乗りを惑わすセイレンや魔女など、数々の困難にあい部下も船も失ったすえにようやく帰国し、二十年もの留守のあいだ妻につきまとっていた求婚者らを、すべて討ち果たしたのだった。

幻想と深い味わいの短編集

本作のオデュッセウスは、戦場で自分の分身にでくわしたり、死んだアキレウスの身代わりにロボットをこしらえたり、妻の浮気を発見したりと、驚きの新冒険をくりひろげる。意表をつく展開やみごとなオチが描き出す、人生の哀しみや人間心理の微妙な綾がしみじみと味わい深い。ボルヘスやイタロ・カルヴィーノの作風に連なる、奇想と幻想に満ちた短編集である。◇矢倉尚子訳　四六判　二二〇頁　定価二五二〇円（本体二四〇〇円）7月中旬刊

ISBN978-4-560-08152-5

パラドクシア・エピデミカ

ルネサンスにおけるパラドックスの伝統

ロザリー・L・コリー［著］

本書は、ギリシア・ローマの雄弁術から、中世の神秘主義哲学（否定の神学）を経て、ルネサンスにおける科学・文芸・思想の代表的なパラドックス作品まで、百科事典的に通観し、ルネサンスのあらゆるパラドックスのタイプを分析した名著だ。

西欧文化におけるパラドックスの伝統は、現代にまで連綿と受け継がれているが、それが顕著に表れたのが、十六～十七世紀であった。エラスムス、ラブレー、ミルトン、シェイクスピア、ジョン・ダンなど、文学史上の巨匠たちが、さまざまなタイプのパラドックス文学を発表、「パラドクシア・エピデミカ」（風土病としてのパラドックス）が時代を席巻した。著者によれば、パラドックスの徹底した自己言及・自己分析こそが、ルネサンスをルネサンスたらしめた、という。

待望の名著、高山宏による完訳！

パラドックス文学に発し、否定神学、静物画から、自然科学における「言葉と物」の乖離の異貌まで、逆説のルネサンスを各分野に拾う本書は、人文科学批評・文化史の世界に、本格批評のあるべき指標を示す傑作の誉れ高い。訳者が思想的バックボーンとし、邦訳をライフワークとした所以だ。著者は元ブラウン大学教授。比較文学の大家であり、六〇年代にジャンル論、シェイクスピア論など精力的に展開し、ルネサンス研究を活性化したが、惜しくも事故死した。

◇高山宏訳　A5判　六六〇頁　定価七九八〇円（本体七六〇〇円）

ISBN978-4-560-08147-1

もうすぐ夏至だ

永田和宏［著］

短歌と科学の半生記

細胞生物学の権威であり、同時に日本の短歌界の第一人者でもある著者の、初めてのエッセイ集。

家族全員が歌人という短歌一家として知られるが、なかでも昨年惜しくも亡くなった妻・河野裕子との日々を通じて、著者自身の創作もより深まっていった。

その錘（おもり）のついたような「大切な時間」が、本書には凝縮されている。著者のもっとも古い記憶、三歳のときに亡くなった母の葬式の朝のこと。学生時代に高安国世に出会い、短歌を始めたこと。京大短歌会で河野裕子に出会ったこと。民間会社に就職したものの、研究者になりたくて当てもなく大学に戻ったこと……。

表題は、著者の短歌「一日が過ぎれば一日減つてゆく君との時間　もうすぐ夏至だ」から。これは、河野裕子に乳癌の転移が見つかったときのものだ。

「にわかに妻との時間が抜き差しならない切実なものとして、心を占め始めた。一日一日をできるだけ一緒に楽しく過ごしたいと願う。しかし、楽しければ楽しいだけ、そのことによって減っていく時間はいっそう切実に惜しまれるのである」

科学と文学とを真摯に生きようとする著者の姿勢から、静かで大きな感動が沸き起こってくる。一読を薦めたい。◇四六判　二三三頁　定価一九九五円（本体一九〇〇円）

ISBN978-4-560-08131-0

銀座の喫茶店ものがたり

村松友視［著］

銀座に息づく喫茶店の「いま」

子供から大人まで、銀座を歩いて喫茶店に入ることは一種特別な体験かもしれない。著者は、京橋にある出版社に勤務した編集者時代、その後作家として独立してから現在にいたるまで、銀座の喫茶店に特別な思いを抱いてきた。本書は、二〇〇九年一月から二〇一〇年十二月まで、銀座に点在する新旧の喫茶店全四五店を訪ね歩き、タウン誌「銀座百点」に二年間連載した人気エッセイの単行本である。銀座に息づく喫茶店の今昔と、店それぞれの「ものがたり」を探る道のりが、著者ならではの洒脱な文章で綴られる。

訪ねた四五店は、資生堂パーラー、カフェーパウリスタ、洋菓子舗ウエスト、銀座文明堂、不二家、銀座コージーコーナー、ブリッヂ、カフェ・ド・ランブルなどの老舗から、ティールーム、抹茶・煎茶カフェといった新しい趣向の店までさまざま。また、月光荘画材店、伊東屋など、文具店だが喫茶スペースを持つ店も取り上げられている。

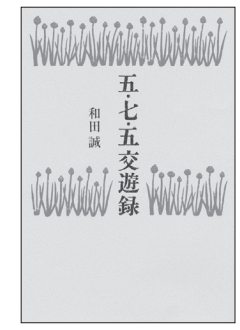
店名の由来や創業時の逸話、店主の来歴など、著者のインタビューによって知られざるエピソードが掘り起こされ、それぞれの店が歩んできた歴史と喫茶店文化の盛衰が交差する瞬間が垣間見える。喫茶店の古い記憶をたどる著者自身の体験も振り返りながら、一人の作家が訪ね歩いた店の奥行きを楽しめる一冊。

◇四六判　二一二頁　定価一八九〇円（本体一八〇〇円）

ISBN978-4-560-08144-0

五・七・五交遊録

和田 誠［著］



俳句を贈る贅沢な趣味

大切な友人に句を贈る――この優雅で贅沢な趣味は、なにも俳人だけの特権ではない。幅広い分野で活躍する人気の著者が、本書でその一端を披露した。

そもそも著者が俳句に関心をいだくようになったのは、小学生のころからだというが、本格的に始めたのは、現在も続く「話の特集句会」。一九六〇年代のある正月、永六輔ら数人が集まって定例の句会を開こうという相談がまとまった。当時の「話の特集」は多くの文化人が集う熱気あふれる雑誌で、当然ながらいろいろなジャンルから数多くの同人が参加した。まさに多士済々といったところだ。

数年後、そこでの句を中心にまとまったのが、著者の「幻の句集」として噂の『白い嘘』。その出版記念パーティーで、出席者それぞれに宛てて本の扉に一句記したのが評判を呼び、ほかのメンバーや友人からも頼まれて、即興から苦吟まで、それぞれの特徴や思いを句にした。

例をあげれば、小沢昭一には「ハモニカを吹く人の背や春茜」、岸田今日子には「眠る女なほ眠らせし罌粟畑」、黒柳徹子には「楼蘭に架かりし虹の大いなる」……他にも多くの人に宛てた句を披露している。

本書は、俳句を中心にした自伝風の読み物で、才人の片鱗をうかがわせる、楽しい一冊となっている。

◇四六判　二五四頁　定価二四一五円（本体二三〇〇円）

ISBN978-4-560-08145-7

新藤兼人伝　未完の日本映画史

小野民樹［著］

はじめての本格的評伝！

二〇一一年、白寿を迎え、自らの「映画人生最後の作品」として制作された最高傑作『一枚のハガキ』の公開にあわせ、評伝の決定版として刊行される本書は、映画監督でありシナリオライターである新藤兼人の奮闘百年の記録である。

新藤兼人のシナリオや著書、雑誌や新聞に発表したインタビューなど膨大な記事を繰っていくと、一時の名声に安住せずに、作っては毀（こわ）し、毀してはまた作る、孤独な芸術家の貌（かお）が浮かび上がってくる。さまざまな風評をものともせず、自分のやりたいことだけをやるために、どんな惨めな現実にも立ち向う政治的人間の素質も持ち合わせている。

個々の負け戦で絶望することなく次々と新たな奇襲戦略を組み直す、野戦の指導者さながらの新藤兼人による前衛的な作品は、「日本映画」の枠を超えた。

日本映画界を代表する、最高齢の映画監督！　その「百年の孤独」な歩みを昭和史とともに辿ってゆく。シナリオも巧みに引用しつつ史実を積み重ねながら、日本映画の名匠や名優たちとのエピソードをはじめ、当時の風俗を活写する。

日本映画をめぐる創造の厳しさと愉しみを描いた、書下ろし七五〇枚。全作品年譜・人名索引付。

◇四六判　三五〇頁＋カラー口絵八頁　定価二九四〇円（本体二八〇〇円）7月下旬刊

ISBN978-4-560-08148-8

昭和食道楽

矢野誠一［著］　唐仁原教久［絵］

つつましき味覚散歩

「とんかつもいろいろ食べてみましたが、やっぱり豚がいちばんですな」

これは古風な女形として知られた九代目澤村宗十郎の、舞台を離れた一世一代の名言。

一方落語では、戦前から戦中にかけて人気のあった爆笑王、初代柳家権太郎の、

「きょうは牛肉でとんかつをこしらえるってえことをききましたから……」

が有名だ。世にとんかつ愛好者が多いことは、専門店が数多く存在することでもわかる。永井荷風、久保田万太郎など、文人で一家言ある向きもあちこちでその蘊蓄を傾けている。

昔からある食べ物は、子ども時分の生活の記憶と重なって、どこか懐かしい。油揚もその一例だろう。彦六という隠居名で世を去った噺家の林家正蔵は、

「油揚の焼いたのくらい、酒によくって、おまんまにいいものはありません」

の名せりふを残している。

本書は、こよなく芸人を愛しつづける著者が、半生を振り返りながら食にまつわる逸話をいなせに語った、志ん生ならぬもうひとつの「貧乏自慢」でもある。アイスキャンデー、塩煎餅、ハム、鶏卵など15の食べ物から、昭和という時代の、つつましくもささやかな人生が浮かび上がってくる。唐仁原教久の装幀や挿絵が興趣を添える。

◇四六判　二三八頁　定価二四一五円（本体二三〇〇円）7月中旬刊

ISBN978-4-560-08150-1

本の魔法

司修［著］

装幀の濃密な背景

戦後を代表する数々の文学作品の装画・装幀を手掛けてきた第一人者が、その濃密な背景を綴った書き下ろしエッセイ。

作家と親交し、作品の深い読みを装画・装幀に表現してきた司修は、その過程で作家たちから〝生き方〟の影響を受け、人生の色彩を増やしたという。本の魔法にかかっていたのは司修のほうだった。本書では、思い出深い作品を改めて読み直しながら、熱を帯びた時代の、忘れえぬ作家たちとの交流を描き出す。密に関係しあう人間同士の姿、真実を追い求める姿――。十五の作品から浮かび上がるのは、まさに人間の普遍的なテーマである。人と人とのつながりが求められる今、本書は強烈なメッセージを訴えかける。

【取り上げた作品】

『杳子・妻隠』古井由吉／『富士』武田泰淳／『埴谷雄高全集』埴谷雄高／『硝子障子のシルエット』『死の棘』島尾敏雄／『岬』中上健次／『なつかしい本の話』江藤淳／『癩王のテラス』三島由紀夫／『月山』森敦／『白夜を旅する人々』三浦哲郎／『修羅の渚―宮沢賢治拾遺』真壁仁／『明恵　夢を生きる』河合隼雄／『私のアンネ＝フランク』松谷みよ子／『河原にできた中世の町』網野善彦／『寺泊』水上勉／『弱い神』小川国夫

◇四六判　二六六頁　定価二一〇〇円（本体二〇〇〇円）

ISBN978-4-560-08143-3

サムライブルーの料理人 サッカー日本代表専属シェフの戦い

西芳照［著］

W杯ベスト16、アジア杯優勝と躍進するサッカー日本代表。選手たちを「食」で支え続ける専属シェフがいる。本書の著者、西芳照だ。西が最初に日本代表の海外遠征に帯同したのは二〇〇四年三月、シンガポールで行なわれたW杯ドイツ大会アジア地区予選。ジーコ監督時代から現在に至るまで、日本代表の海外遠征に西は欠かせない存在だ。本書はW杯ドイツ大会、W杯南ア大会を経て、アジア杯優勝に至るまでの舞台裏を専属シェフが初めて明かす感動のドキュメント。

日本代表の活躍を支える料理の秘密

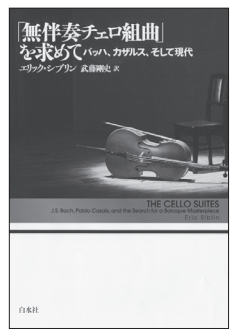
環境や食習慣の異なる海外で選手たちが最大の力を発揮できるように、西は衛生面に細心の注意を払うと同時にメニューや調理法に様々な工夫を凝らす。それが選手たちの体調の良さだけでなく、チームの雰囲気づくりにもつながっている。現地ホテルの厨房で料理することには苦労も伴う。選手たちの戦いの陰に、シェフのもう一つの戦いがあった。

W杯、アジア杯ともに延長戦の末まで走り続けた選手たち。どんな料理がスタミナ源になっているのか？ 試合前後に何を食べて戦っているのか？ 代表選手は食事にどのような配慮をしているのか？ 全ての秘密が本書に詰まっている。W杯南ア大会の全メニューを日記で紹介。巻末レシピ付！ W杯メニューを再現できる。◇四六判 二六〇頁 定価一六八〇円（本体一六〇〇円）

ISBN978-4-560-08111-2

「無伴奏チェロ組曲」を求めて バッハ、カザルス、そして現代

エリック・シブリン［著］



二〇〇〇年秋のある晩のこと。それまで新聞でポピュラー音楽の評論家を務めていた著者は、ふとした思いつきで行ってみたクラシック音楽のリサイタルで、はじめて耳にするバッハ『無伴奏チェロ組曲』の、地味ながら豊かな、素朴なようで洗練された音楽にすっかり魅せられてしまう。たった一台の楽器が四本の弦で奏でる、この曲の何がこれほどまでに人を惹きつけるのか？ この曲はどういう背景から生まれ、どのような道をたどって、現代のわれわれのもとへやってきたのだろう？

名曲と偉大な音楽家へのオマージュ

本書は実際の『チェロ組曲』の構成を模して、「第一組曲」から「第六組曲」までの六章がそれぞれ「プレリュード」「サラバンド」などと題された六つのパートに区切られている。それぞれの「組曲」で著者は、作曲者バッハとこの曲を世に広めた功労者カザルスの生涯を語りつつ、ミッシャ・マイスキーやピーター・ウィスペルウェイらチェリストたちのインタビューもまじえて、この楽曲のなりたちや受容について考察する。

大学で史学を専攻し、ジャーナリストとして音楽に接したのち、現在はドキュメンタリー番組に携わる著者ならではの、音楽と『無伴奏チェロ組曲』への愛あふれる一冊。◇武藤剛史訳 四六判 三六〇頁 定価三七八〇円（本体三六〇〇円）

ISBN978-4-560-08130-3

パリ歴史事典【普及版】

アルフレッド・フィエロ［著］

パリの歴史といっても、政治史ではない。ここで扱われるのは、パリジャンたちの日常生活の歴史。犬、オペラ、キャバレー、劇場、下水道、市長、宝くじ、男子修道院、地下鉄、売春、四輪馬車といった六〇〇の項目により、文化・政治・宗教から芸術・風俗習慣にいたるまで、パリの生活のありとあらゆる側面が歴史的に論じられている。

たとえば、「歯医者」という項目は次のように始まる。「何世紀ものあいだ、口腔の治療は床屋が行なっていた。現在の理髪師、外科医、歯医者は、床屋の同業組合から分化したものなのである。公道に建てた小屋で抜歯業を営む大道薬売りもいた。そのなかでおそらくもっとも有名なのは、ポン・ヌフ橋に店を出したグラン・トマである」。つづいて、変遷・現在の状況までが詳述されるといった具合。末尾には、参照すべき別の項目も示されている。「これ一冊でパリという途方もなく広大なテーマのネットサーフィンの醍醐味が味わえるわけである。」（「はじめに」より）

パリを知るための必携書

今回の普及版刊行にあたり、人名・地名索引に加え、和文・欧文それぞれの収録項目一覧（収録ページ付）も追加された。さらに引きやすくなった、待望のコンパクト版。◇鹿島茂監訳 四六判 八〇六頁 定価四九三五円（本体四七〇〇円）

ISBN978-4-560-08157-0

文庫クセジュ

Q958 「笑い」その意味と仕組み

エリック・スマジャ［著］

■人はなぜ、そして何を笑うのか？

一九六五年、ウガンダ。ひどい飢饉にみまわれているイク族の村。民族学者が別れの握手をすると、やせこけた村人の体がもちあがってしまう。彼は「ずっと食べていなかったんで」と言いながらげらげら笑っていた。さらにそこでは、母親は怪我をした我が子を笑いものにし、子供は老人を嘲っていたという。

本書は、そんな事例をはじめ、アリストテレスからベルクソンなどの思想、文学、動物行動学、生理学、精神分析、人類学などの論考をとおして笑いの本質にせまる。喜びと快感だけでなく攻撃性と不安も表わす笑い、個人的感情から切り離された社会的笑いなど、その複雑な機能があきらかになる。さまざまな角度からの分析を経て、はじめてみえてくる、知られざる笑いの姿を紹介する。◇高橋信良訳 新書判 一六四頁 定価一一〇三円（本体一〇五〇円）

ISBN978-4-560-50958-6

Q959 「ガリレオ」伝説を排した実像

ジョルジュ・ミノワ［著］

■その生涯と名誉回復までの道のりを解説

「それでも地球は回っている」と言ったというのは作り話にすぎない、ピサの斜塔での実験は行なわれていない、彗星は存在しないと述べていた……など、伝説をとりのぞいた実像にせまる。七八年の栄光と失意の生涯と、死去から三五〇年後の名誉回復までの歩みを、かずかずの書簡や著書からの引用によって裏づけながら、たどってゆく。書簡からは、その人柄がしのばれ、教皇や修道会の思惑、教会側は寛大にふるまう道を模索していたにもかかわらず有罪判決を生んだかずかずの不幸な状況、教会の自縄自縛の様子がいきいきと描かれている。

科学的発見ならば、ケプラーやニュートンのほうがガリレオより上であり、太陽中心説はコペルニクスから引き継いだものだ。ガリレオの真の偉大さはどこにあるのか？ それは結論でみごとにまとめられている。◇幸田礼雅訳 新書判 一七五頁 定価一一〇三円（本体一〇五〇円）7月中旬刊

ISBN978-4-560-50959-3

白水uブックス

U1122「芸術家列伝 1 ジョット、マザッチョ ほか」
U1123「芸術家列伝 2 ボッティチェルリ、ラファエルロ ほか」
U1124「芸術家列伝 3 レオナルド・ダ・ヴィンチ、ミケランジェロ」

ジョルジョ・ヴァザーリ［著］

（1）ISBN978-4-560-72122-3
（2）ISBN978-4-560-72123-0
（3）ISBN978-4-560-72124-7

■生誕500周年記念出版

ヴァザーリ《自画像》

ヴァザーリ（1511-74）はイタリアの画家、建築家、都市設計家、庭園設計家、祝祭演出家として活躍した。なかでも彼の名を高めたのは、チマブーエから約三百年間にわたる、美術家の生涯を扱った『芸術家列伝』で、ルネサンス美術を知るうえでの最も重要な資料であると同時に、読み物としての面白さを兼ね備えており、ダンテの『神曲』とならぶ古典とされている。

【第1巻】前期ルネサンスを代表する九人（チマブーエ、ジョット、シモーネ・マルティーニ、ウッチェルロ、マザッチョ、ピエーロ・デルラ・フランチェスカ、フラ・アンジェリコ、フィリッポ・リッピ、ベルリーニ）の伝記を収録。◇平川祐弘、小谷年司訳 新書判 二八八頁＋カラー口絵四頁 定価一三六五円（本体一三〇〇円）

ジョット《ヨアヒムの夢》

【第2巻】後期ルネサンスを代表する六人（ボッティチェルリ、マンテーニャ、ジョルジョーネ、ラファエルロ、アンドレーア・デル・サルト、ティツィアーノ）の伝記を収録。◇平川祐弘、小谷年司訳 新書判 二八六頁＋カラー口絵四頁 定価一三六五円（本体一三〇〇円）

ボッティチェルリ《マニフィカートの聖母》

【第3巻】ルネサンスの巨匠二人（レオナルド・ダ・ヴィンチ、ミケランジェロ）の伝記を収録。◇田中英道、森雅彦訳 新書判 二五二頁＋カラー口絵四頁 定価一三六五円（本体一三〇〇円）7月下旬刊

レオナルド・ダ・ヴィンチ《受胎告知》（部分）

一歩先のフランス語をめざす人のための３冊シリーズ

シリーズ《中級フランス語》

「中級フランス語　つたえる文法」 曽我祐典［著］

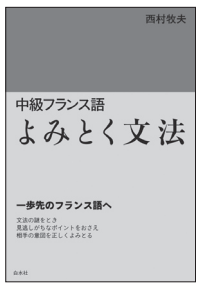
ISBN978-4-560-08562-2

「つたえる文法」では、フランス社会におけることばづかいについて考えます。たとえば､同僚に「プリンターを使わせて」とフランス語でお願いする場合、あなたならどう言いますか？

聞き手がどのように受け取るかを想像し、その場にふさわしい表現を使いわけましょう。ことばづかいの陰に文法あり。動詞と構文を中心にフランス語のしくみを体系的にとらえながら、言いたいことを的確につたえるセンスをみがきます。

◇四六判　183 頁　定価 1995 円（本体 1900 円）

「中級フランス語　よみとく文法」 西村牧夫［著］



ISBN978-4-560-08565-3

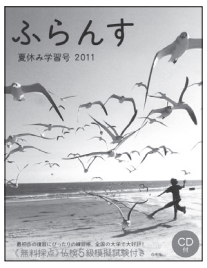
「よみとく文法」では、小説、映画、ニュースなどから集めた文例を多数紹介します。初級文法をひととおり終えると、単語の意味がわかっただけで、文章や会話を理解しているような気分になりがちです。ところがこの思い込みには、「読み落とし」という危険がつきまといます。時制を勘違いしたり、否定を肯定に錯覚したりしてしまうことすらあります。文法の謎をとき、「見逃したら大間違い」というポイントを押さえながら、相手の意図を正しくよみとる力をつちかいましょう。

◇四六判　195 頁　定価 1995 円（本体 1900 円）

■好評既刊「**中級フランス語　あらわす文法**」東郷雄二著 ◇定価 1995 円（本体 1900 円）

「ふらんす 夏休み学習号 2011」【CD付】 ふらんす編集部［編］

無料採点仏検５級模擬試験付



ISBN978-4-560-06211-1

フランス語の最初歩を復習して秋の仏検５級にチャレンジしたい方にぴったりの練習帳。

単語ノートと訳の付いたテキスト、名詞と冠詞の性・数から重要動詞の直説法現在形までの前期の文法のまとめ、やさしい練習と CD による聴き取り問題で､目と耳から文法の整理ができます。

付録の仏検５級模擬試験は夏休みの復習課題に最適、全国の大学で大好評です。答案は当社で責任をもって採点し、返送します。　◇ B5 変型　48 頁　定価 1300 円（本体 1238 円）

「中級オランダ語　表現と練習」【CD付】

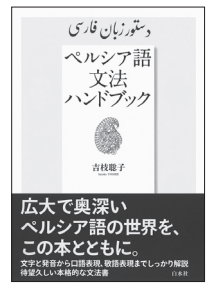
クレインス フレデリック、クレインス 桂子［著］

ISBN978-4-560-08563-9

オランダ語の基礎知識のある学習者がさらにレベルアップを図るための学習書です。全 25 課、各課の冒頭には自然なオランダ語による会話文あるいは長文テキストを掲げ、様々な場面を想定した題材により、オランダの生活、文化、歴史、地理などに対する理解を深めます。各場面でよく使われる表現にとりわけ重点を置き、「会話練習」「作文練習」「テキストについての質問」などの練習問題では徹底した反復練習を行い、表現が確実に身につくよう工夫されています。なお本書では、北部ベルギーのオランダ語にも配慮しました。

◇ A5 判　186 頁　定価 3150 円（本体 3000 円）

「ペルシア語文法ハンドブック」 吉枝聡子［著］

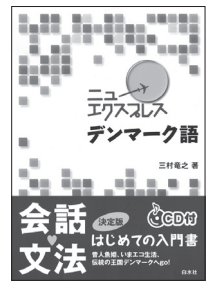


ISBN978-4-560-08569-1

かつてユーラシアの広大な一帯で使われ、現在はイランの公用語、またアフガニスタンやタジキスタンでも話されるペルシア語。本書は文字と発音から、口語表現や敬語表現にいたるペルシア語の全体をじっくりと詳しく解説していく待望久しい本格的な文法書です。なお、各用例・各例文にはラテン文字表記も掲載しています。動詞活用形や複合動詞の一覧、イランの暦など巻末資料も充実。この一冊とともにペルシア語の世界を歩いてみませんか。

◇ A5 判　295 頁　定価 4410 円（本体 4200 円）

「ニューエクスプレス デンマーク語」【CD付】 三村竜之［著］



ISBN978-4-560-08564-6

デンマーク ── ヴァイキングからアンデルセンの童話を経て現代の高度福祉社会まで、距離の遠さにも拘わらず日本人にもなにかと身近に感じられる北欧の王国。ゲルマン系のその言語は英語やドイツ語の仲間であり、スウェーデン語やノルウェー語とは兄弟のような深い関係を持っています。人口 550 万人と小さな国ですが、アンデルセンの他にもキルケゴールのような哲学者を生み、原発を保有しないエコ生活に徹し、最近ではインテリアデザインなどでも私たちを惹きつけてやまない北欧の美しい世界へ、デンマーク語を身につけて入っていきませんか。　◇ A5 判　145 頁　定価 2940 円（本体 2800 円）

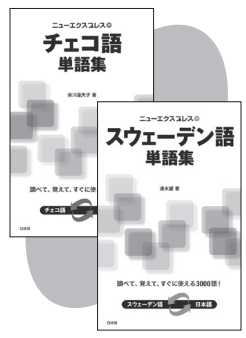
調べて、覚えて、すぐに使える3000語！

ニューエクスプレス単語集

いつでもどこでも、気軽に使える双方向の単語集。
調べやすいアルファベット順、覚えやすいジャンル別、２つの機能を持った便利な単語集です。コンパクトな辞書としても使えます。

【外国語→日本語】3000 語
◎見出し語はアルファベット順、読みがなつき ◎重要語には用例つき

【日本語→外国語】1000 語
◎関連語がまとめて学べるジャンル別 ◎日本語索引つき



ニューエクスプレス チェコ語単語集　保川亜矢子［著］
ISBN978-4-560-08566-0
◇新書判　257 頁　定価 2310 円（本体 2200 円）7 月下旬刊

ニューエクスプレス スウェーデン語単語集
速水 望［著］　ISBN978-4-560-08568-4
◇新書判　250 頁　定価 2310 円（本体 2200 円）7 月下旬刊

好評発売中

ニューエクスプレス チェコ語【CD付】　保川亜矢子［著］
ISBN978-4-560-06786-4
◇ A5 判　150 頁　定価 2520 円（本体 2400 円）

ニューエクスプレス スウェーデン語【CD付】　速水 望［著］
ISBN978-4-560-06785-7
◇２色刷　A5 判　149 頁　定価 2520 円（本体 2400 円）

はじめての入門書 決定版！

リレーエッセイ

ことば紀行

第７回
「アイヌ語」
中川 裕

【主な使用地域】
北海道を中心とした日本国内
【話者数】母語話者は数名～十数名だが、学習人口は年々増えつつある
【使用文字】カナおよびローマ字
【あいさつしてみよう】
Irankarapte. Issorore.
イランカラプテ　イッソロレ
（こんにちは。ようこそ。）

冬島にて。穴のあいた巨岩が海際にそびえ立っている

アイヌ語地名の旅

北海道の大半の土地は明治に入るまでほとんどアイヌ人しか住んでいなかった。だから、現在でも私たちが北海道を旅して遭遇する地名の多くはアイヌ語起源である。そこに後から入った和人（日本のマジョリティ）が、意味と関係なく漢字を当てたものだから、ややこしいことになった。道東の厚岸の近くに重蘭窮という地名があるが、今はやりの難読漢字でもトップクラスの難問だろう。答えはチプランケウシという（どう読んだらそうなるんだ！）。アイヌ語を知っている人であれば、読み方さえわかればなんのことはない、すぐに意味のわかる地名である。cip「舟」ranke「下す」usi「処」というのが語源で、山の中で丸木舟を掘って、それを下してくる場所の意味である。私の住んでいる千葉県にも、酒々井（しすい）だの匝瑳（そうさ）だの、教えられなきゃ読めないし、読めても意味のわからない地名が多々あるが、アイヌ語の地名は読み方がわかりさえすれば、何とか元の意味がわかるものが多い。しかし、中には和人によって日本語につけ替えられてしまったものもあるので、何でもアイヌ語で解けるわけではない。飛行場のある千歳がそのいい例で、ここはもともと支笏湖にその名の残る si「大きな」kot「窪み・沢」という名だったのが、死骨に通じるというので、函館奉行によって「おめでたい」名前に替えられたのである。余計なお世話というものだ。ところで、アイヌ語だか日本語だか迷う地名もあって、日高の様似町に冬島というところがある。アイヌ語学者である私からしてもアイヌ語っぽい語感が全然感じられない地名である。しかし、実際に行ってみるとそこには島も何もあるわけではなく、穴のあいた巨岩が海際にそびえ立っているだけである。実はこれが冬島＜ puyosuma ＜ puy「穴」o「ついている」suma「岩」だったのだ。アイヌ語地名はこのように、地形や当時の人たちの生活にどう関わっていたかで名づけられているものが多く、かつての生活様式がほとんど見られなくなった現在でも、アイヌの人々のその土地との関わりの歴史をまざまざと知らせてくれるものであり、アイヌ語を学ぶひとつの楽しみとなっている。もっとも、あの富良野が＜ hura「臭い」nu「持つ」i「処」、つまり十勝岳からの硫黄の匂いで臭いところという意味だと知ったら、ちょっとがっかりする人もいるかもしれないが。

（千葉大学人文社会科学研究科）

山姥（やまんば）の辞書

小池昌代

(二)「毀（こわ）れる」

見ておきなさい。見るだけでいいから、見ておいたほうがいい。そう、すすめてくれる人がいて、五月の終わり、被災地・宮城の石巻港へ行った。

自分がどうしたいのかはわからなかった。行くべきなのか、行きたいのか。判断すること自体が間違っているような気がした。しかし、見るしかないと思った。

学生が一人、同行した。石巻は、福島から近い。若い人を誘うことには躊躇があったが、若い彼には見てほしいという思いもあった。見てほしいと言われて迷っていたわたしが、今度は他の人に、見てほしいと願っていた。

内陸部は穏やかだったのに、漁港に降りると、思いのほか強い風が吹いている。

カモメの群れが飛んでいた。

車で港まで運んでもらう。途中、車道は確かに片付けられていたけれど、道の両側には、根をあらわにした大木がころがり、信号機は光を失い、両脇の家々、墓地や学校、様々な施設、風景はみな毀れていた。住民の姿は見かけなかった。

漁港には、水産物を加工する工場や製紙工場がある。水をかぶった紙が、ぞうきんの幽霊のようにぼろぼろと千切れ、残った鉄柱にからまっている。

風の向きと、立つ位置によっては、妙な臭気が強く漂ってきたり、ふっと消えたり。

臭いの元はなんだろう。強い潮と、泥と、なにか腐ったもの。とにかく臭う。鼻をつく。

だがどこかで、嗅いだことがあるような気がする。記憶を探る。子供のころ？　いや、大人になってもどこかで嗅いだぞ。海辺？　そう、どこかの海辺の町だった。

懐かしかった。海と陸との境目には、いつだって、生きるものたちと死んだものたちの臭いが、混沌と交ざりあっている。あれは命のくさみなのだろうか。わたしはもっと嗅ぎたくなって、鼻腔を広げ、目を閉じる。

かつてわたしは父から東京大空襲、祖母からは関東大震災の話を、たびたび聞いて大きくなった。繰り返し聞かされても、それが直接の経験になるわけではない。だが今回、石巻で見た風景のなかに、空襲後の焼け野原や焼けただれた隅田川、大震災後の下町が重なって見えた。言葉でなく、体の感覚で、わたしは初めて、「死んだ人と、共に生きる」ということを思った。

ここにいる、ここにいるはずなのよ。

救助隊の人にそう言って、地面の下を指差し、昨日まで話をしていた隣人を、汚泥の下から掘り起こしてもらったという女性の話を聞いた。

目をつぶる。無だ。何も見えない。言葉を書こうとして、言葉が切れる。あ、が、が、が、ぐ、ぞ、ぶ、た、し、さ、ぬ、た、け、く。意味のつぶされた言葉の破片が、体のなかに散乱して、わたし自身を傷つけた。ああ、汚泥にわたしはなりたい。ひどい疲れのなかで唐突に思う。

◇こいけ・まさよ＝一九五九年東京生まれ。著書に、詩集『コルカタ』『ババ、バサラ、サラバ』『永遠に来ないバス』、小説『タタド』『弦と響』、エッセイ『屋上への誘惑』など。

中国を読む

時事通信外信部記者
城山英巳

■「民を相手とする」中国外交

日中韓首脳会談出席のため５月21、22両日来日し、宮城県と福島県の被災地を慰問して回った温家宝首相。温首相を取材し、中国の対日戦略の変化を実感した。

大津波で町がのみ込まれた宮城県名取市閖上地区。がれきだらけの悲惨な風景の中に立った温首相はこう言って顔を歪めた。「震災を前にして表した日本国民の冷静さ、団結力、不屈の精神を見た」

名取市の避難所では８歳の男の子を膝の上に乗せ、「頑張って幸せな生活を取り戻してください」と一家に語り掛けた。原発事故に苦しむ福島の避難所では子供たちにパンダのぬいぐるみを贈り、笑顔を誘った。隣にいた菅直人首相と対照的な「情」のこもったふれ合いは、被災者の対中感情好転に一役買った。

温首相は国内でも四川大地震などの大災害が起こると、即座に駆け付け、被災者の手を握り、涙ながらに語り掛ける。その「名役者」ぶりを批判する声もあり、東北の被災地で見せたパフォーマンスに日本外交筋も「板に付いたものだ」と感心したが、筆者は、温首相の振る舞いに「本心」と「戦略」の両方が込められていると見る。

「本心」は言うまでもなく、「地震と津波がもたらした破壊に目を開けられないほど心が痛み、国民の皆さんの悲しみを切実に感じ取った」（日中韓首脳会談後の共同記者会見での発言）という感情。「戦略」とは、いかに対日関係を安定させ、日本国内での中国の存在感を高めるかという難題。

今回の訪日で温首相は今年下半期に復興支援のための視察団を派遣すると表明したが、狙いの一つは、東北地方の産品を購入することだ。「東北復興のため中国が大きな力を発揮していることを日本国民に示したいのだ」と日中関係筋は語る。温首相の日本観光「安全宣言」を受け、震災後に途絶えた大量の中国人観光客も戻って来る。

筆者は最近、『中国人一億人電脳調査』（文春新書）を上梓し、ネット社会・中国で「民」の対日観に変化が表れていることを詳述したが、東日本大震災は「民」に従来とは違う日本像をもたらした。

政治が混乱し、日本の首相がころころと変わる中、民主党に頼るだけの対日戦略では日中関係は発展しない。「民主党を相手とせず、国民を相手とする」。日中関係は「国家外交」から「国民外交」への転換期を迎えている。

◇しろやま・ひでみ＝2002年６月から07年10月まで中国総局（北京）特派員。著書に『中国共産党「天皇工作」秘録』（文春新書）ほか。

鎌田浩毅
「知的生産」のための術語集

第２回

「エセー」

「書くこと」の重要性

ク・セ・ジュ？「私は何を知っているか？」ここからすべての科学が始まる。自然科学は、人類が知らない事実は何かを明らかにすることから開始する。このためには、知っていることと知らないことを厳格に分けなければならない。そこでは自分が知らないことを知ったかぶりしない、という態度がもっとも重要なのだ。その思考法の原典はギリシャの哲学者ソクラテスにある。

一六世紀フランスのモラリスト、モンテーニュは、この「ク・セ・ジュ？」を生き方の指針とし、ギリシャ思想を西洋近代文化へ連結した。知らないことを明確にするには、冷静に自分を振り返らなければならない。未知の内容が抽出されて初めて、人間は知るための行動を起こすことができる。人は無知だからこそ知識を求め、科学は進歩してきたのだ。

太平洋戦争が勃発した一九四一年、プレス・ユニヴェルシテール・ド・フランス社は、コレクション《クセジュ》を発刊した。「普遍と総合という百科全書の精神にのっとり、人々のためにつくす最上の方法は知性をたかめ文化財をゆたかにすることであると確信した」（「読者に」白水社、一九九〇年）。そしてこの《クセジュ》こそ、一五七六年ころにモンテーニュが鋳造させた記念碑に刻まれた句だったのである（ロベール・オーロット著『モンテーニュとエセー』文庫クセジュ、五ページ、白水社）。

代表作『エセー』は、もともとギリシャ古典の注解やエピソードの編集をしようと始められたのだが、モンテーニュは次第に人間そのものを描くことに熱中していった。この過程で彼は、知識がいかに相対的なものであるか、人はなんと矛盾した二重規範の中で生きているか、に思い至ることになる。「絶対的なもの言いをする独断論的な断言のかずかずにたいして、モンテーニュは力づよく、『それは全然ちがう』という彼の考えをおし立てる」（『モンテーニュとエセー』二二八ページ）。その結果、自分の判断は絶対正しいと譲らない高慢と不寛容を許さない、モラリストにして懐疑主義者の姿勢が確立したのである。

ちなみに『エセー（essai）』の由来は動詞「エセイユ（essayer）」から来ており、「こころみること」の意である。すなわち、権威の言うことを何でも鵜呑みにせず、まず自分で試してみることを彼は薦める。ここには科学における「実験」の精神が厳然と存在している。

一方、エセーはエッセイ（随筆、随想）に通ずる。ものを書くことは本来、自分は何を知っているだろうかを問うことでもある。本当に知っているのかどうかを検証しながら、文字として書き出して客観視すること。モンテーニュは自分が何を知り、また何を知らないかを確認するために、一五年以上もかけて文章を認（したた）めていった。

試行錯誤の集大成には、彼の頭を駆け巡った思考のプロセスが克明に残されている。モンテーニュは、「他の人びとが持ちこむ返答群についてや、問い合わせによって導き出された質問群にたいして（中略）、問い合わせの進行中に判断の行為がそのなかで実行されるさまざまな状態についても、自分自身に問いを発」した（『モンテーニュとエセー』八九ページ）。本当に大切なことは、結論ではない。思索の過程そのものが彼の人生だったのである。

実は、随筆とエッセイは違うのだ。随筆は『徒然草』や『枕草子』のようによしなしごとを記すものであり、全体に一貫した構造がなくともよい。文字通り「ひぐらし硯に向かいて、心にうつりゆくよしなしごと」を綴りながら、日常に垣間見える些事を切り取り、ゆっくりと時間をかけ愛（め）でてゆく。

それに対して『エセー』では、それぞれの主題が呼応し、壮大な構造を作っている。彼は刊行されてから後も、自らが残した過去の軌跡に書き込みを続けていった。こうして『エセー』は単なる随筆ではなく、極めて論理性の高い思索の手引きとなったのである。

自分が分かっているのかどうかは、文章に記すとはっきり見えてくる。頭の中だけではあやふやな論理も、外在化することによってスジが通るようになる。科学の世界でもまったく同じで、実験や調査によって得た新知見は必ず論文化し、データと論理の欠落を発見する。文章を書くことは知識を他者へ伝え、さらに後世に残すだけでなく、書いた本人の思考を鍛えるという重要な副産物があるのだ。

ソクラテスの対話法もモンテーニュの懐疑主義も、西洋思想の論理を鍛えるために多大の貢献をした。私自身が長年モンテーニュと付き合うことで得た知恵は、森羅万象にわたって思考し、自らの思索を点検し鍛錬する重要性である。

『エセー』はモンテーニュが生涯をかけて行った壮大な「こころみ」が記された文章宝鑑なのだ。「ク・セ・ジュ？」を内包したこの優れた記録は、明らかにフランス語の資産に強靱さをもたらした。この古典がフランスにどれほどの豊かさをもたらしたかを考えると、私は羨ましさを禁じ得ない。

◇かまた・ひろき＝京都大学教授。理学博士。専門は火山学・地球科学・科学コミュニケーション。著書に『座右の古典』『知的生産な生き方』（東洋経済新報社）、『世界がわかる理系の名著』（文春新書）、『使える！作家の名文方程式』（PHP文庫）、『火山噴火』（岩波新書）など多数。

● NEWS & TOPICS ●

★〈白水Uブックス〉フェア、全国書店にて開催中！

白水社が自信を持っておすすめするロングセラー・売れ行き良好書20点を中心に、全国書店にて白水Uブックスフェアを開催中です。ぜひ足をお運びください。開催店舗など、詳しくはHPまで。

〈白水Uブックス〉**ベスト20**（価格税込）

キャッチャー・イン・ザ・ライ［ペーパーバック・エディション］（J.D.サリンジャー著、村上春樹訳、924円）
ライ麦畑でつかまえて（J.D.サリンジャー著、野崎孝訳、924円）
インド夜想曲（アントニオ・タブッキ著、須賀敦子訳、945円）
ある家族の会話（ナタリア・ギンズブルグ著、須賀敦子訳、1050円）
変身（フランツ・カフカ著、池内紀訳、599円）
シカゴ育ち（スチュアート・ダイベック著、柴田元幸訳、998円）
カモメに飛ぶことを教えた猫（ルイス・セプルベダ著、河野万里子訳、840円）
豚の死なない日（ロバート・ニュートン・ペック著、金原瑞人訳、945円）
初版グリム童話集 1（グリム兄弟著、吉原高志他訳、998円）
ビザンツ皇妃列伝　憧れの都に咲いた花（井上浩一著、1365円）
フランス中世歴史散歩（レジーヌ・ペルヌー他著、福本秀子訳、1365円）
チベット旅行記（上・下）（河口慧海著、長沢和俊編、各998円）
社会契約論（ジャン＝ジャック・ルソー著、作田啓一訳、1260円）
幸福論（アラン著、串田孫一他訳、1365円）
オペラ・ノート（吉田秀和著、1365円）
気になる部分（岸本佐知子著、966円）
ミラノ　霧の風景（須賀敦子著、914円）
ユルスナールの靴（須賀敦子著、945円）
山の上ホテル物語（常盤新平著、998円）

★2011年度版「ブックカタログ」「新書カタログ」ができました

単行本・シリーズ（語学書・新書以外の全刊行物）を収録した「ブックカタログ」にはいしいしんじさんによる巻頭エッセイ、白水Uブックスと文庫クセジュを収録した「新書カタログ」には千野帽子さんによる巻頭エッセイも収録。発行済みの「辞典・語学参考書カタログ」とあわせ、2011年度版の全カタログが出そろいました。ご希望の方に無料でお送りしますので、小社HPのカタログ請求ページ、または左記までご請求ください。

■Eメール catalog@hakusuisha.co.jp
■電話 03(3291)7811／FAX 03(3291)8448

【近刊予告】8月刊行予定の新刊（2011年7月1日現在）

表示価格は5%税込です。書名・刊行時期等は変更する場合があります。ご了承ください。最新情報および書籍の詳細は、白水社ホームページをご覧ください。

- **アンダー・ザ・ロウズ**（鴻上尚史著、1995円）
- **灯台守の話**［白水Uブックス175］（ジャネット・ウィンターソン著、岸本佐知子訳、1365円）
- **スペイン語検定対策3級問題集**《CD付》（青砥清一編著、2310円）
- **カンギレム**　生を問う哲学者の全貌［文庫クセジュ960］（ドミニック・ルクール著、沢崎壮宏他訳、1103円）
- **デニーロ・ゲーム**［エクス・リブリス］（ラウィ・ハージ著、藤井光訳、2520円）
- **痙攣する女**（仮題）（シリ・ハストヴェット著、上田麻由子訳、2520円）
- **古代ギリシア　11の都市が語る歴史**（ポール・カートリッジ著、橋場弦監修、新井雅代訳、2730円）
- **偽りの来歴**　20世紀最大の絵画詐欺事件（レニー・ソールズベリー他著、中山ゆかり訳、2730円）
- **ヘブライ語文法ハンドブック**（池田潤著、4410円）
- **アフガン諜報戦争**　CIAの見えざる闘い　ソ連侵攻から9.11前夜まで（上・下）（スティーブ・コール著、坂井定雄他訳、各3360円）
- 完全版　**写真ノ話**（荒木経惟著、2310円）
- **韓国語プラクティス100**《CD2枚付》（増田忠幸著、2310円）

編集メモ

『プリーモ伊和辞典』でpeccatoを引くと、「罪」という語義の後に「キリスト教の七つの大罪」の囲みがあり、「強欲」や「色欲」「怠惰」と並んで「憤怒」iraが載っている。そうか、「憤怒」は大罪だったのか！　もっと早く気付いていれば頭の血管が切れることもなかったものを……と後悔してももう遅い。

三月の大地震以来二か月にわたって「メルトダウン」という言葉はタブーとされ、原発反対デモは報道されず、コメンテーターはさかしらに「原発に依存してきた生活」の反省を呼びかける。一億総ざんげだ。冗談じゃない、原発を選択したことなど一度もないぞ！　事故が予想できなかった？　うそつくなっ！　日本には広瀬隆も高木仁三郎もいなかったというのか！　福島の地獄はとっくに描かれていたじゃないか！

かくして憤怒は爆発し、呪詛は口を吐き、血圧は上がり続ける。（罪人）

【お願い】▼住所表記が変更になりましたら、お名前、新住所・旧住所、お届けいたしております本紙のお客さまコードをお知らせください。

書物復権

今年15回目を迎える〈書物復権〉共同復刊は、岩波書店・紀伊國屋書店・勁草書房・東京大学出版会・白水社・法政大学出版局・みすず書房・未來社の8出版社で実施いたしました。復刊書は全国の協力書店店頭にて発売中です。詳細は公式サイト http://booklog.kinokuniya.co.jp/fukken2011/ をご覧ください。

ユートピアの精神

エルンスト・ブロッホ著　好村冨士彦訳
■5880円　A5判／430頁　ISBN978-4-560-08136-5

若きベンヤミン、アドルノに影響を与えた記念碑的名著、30年の訳業を要して全貌成る。内面の暗闇に垂鉛を下ろし既存の哲学を破砕しつつ薄明へと駆り立てる。「新しき生ここに始まる」。（初版1997年・最終版1998年）

アルトー ◎思考と身体

宇野邦一著
■4725円　四六判／382頁　ISBN978-4-560-08137-2

《器官なき身体》とは何か？　加速された身体をめぐる思考をアルトーの全生涯・全作品にたどり、20世紀思想の火山脈を解明する、著者渾身の力作評論。決定版として、巻末に増補！（初版1997年・最終版1999年）

白水社の復刊書　◎表示価格は5%税込です。

エリーザベト・ニーチェ

◎ニーチェをナチに売り渡した女
ベン・マッキンタイアー著　藤川芳朗訳
■5040円　四六判／338頁＋図版16頁　ISBN978-4-560-08138-9

南米パラグアイのジャングルに純粋アーリア人の「新しき村」を建設、さらに兄ニーチェの著作を改竄してヒトラーに接近し、ナチの思想的バックボーンを打ちたてた女性の驚くべき生涯。（初版1994年・最終版1995年）

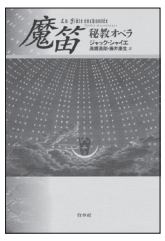
ストリンドベリ名作集

ストリンドベリ著
毛利三彌、千田是也、岩淵達治、石沢秀二、高橋康也訳
■4725円　四六判／396頁　ISBN978-4-560-08140-2

スウェーデンの劇作家による、代表傑作戯曲集。「父」「令嬢ジュリー」「ダマスカスへ」「罪また罪」「死の舞踏」「幽霊ソナタ」を収録。絶えず変貌する魂の遍歴を刻みつけた6編。（初版1975年・最終版1985年）

魔笛 ◎秘教オペラ

ジャック・シャイエ著　高橋英郎、藤井康生訳
■6510円　四六判／380頁＋口絵16頁　ISBN978-4-560-08139-6

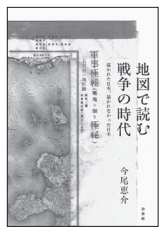


ザラストロや夜の女王は何者なのか……傑作オペラの音楽と台本の両面から徹底的な作品分析を行ない、フリーメイスン秘密結社の伝承を浮き彫りにしながら、その真の全貌を提示する。（初版1976年・最終版1997年）

話題の本　◎表示価格は5%税込です。

白水社

各紙誌絶賛！ 地図でわかる戦争の真実
地図で読む戦争の時代
描かれた日本、描かれなかった日本
今尾恵介著



蛇行を繰り返す線路、忽然と現われる円形の区画、広大な空き地。地図に描かれた戦争の痕跡を古今内外の地図をもとにさぐっていく本書は、植民地や領土問題を考える上でも示唆に富む。●1890円

驚愕の日常を生きる人びとを描いた傑作ルポ
疾走中国
変わりゆく都市と農村
ピーター・ヘスラー著　栗原泉訳

急速に整備される道路網を駆使して各地を巡り、北京郊外の農村と南部の工業都市を舞台に、変化の荒波に翻弄されつつたくましく生きる人びとの日常を描いた傑作ノンフィクション。●2730円

12の〈愛〉のかたちを描いた珠玉の短編集
ヴァレンタインズ
［エクス・リブリス］
オラフ・オラフソン著　岩本正恵訳

「一月」から「十二月」まで、夫婦や恋人たちの愛と絆にひびが入る瞬間を鋭くとらえた、O・ヘンリー賞受賞作を含む12編。現代アイスランド文学の旗手による、珠玉の第一短編集。●2520円

共感、切なさ…心にしみる傑作短編集
すばらしい墜落
ハ・ジン著　立石光子訳

嫁姑問題の意外な解決方法、ペットと暮らす心がまえ、年金と介護現場の苦悩……NYに暮らす中国系移民の生活を描きつつも、わたしたちの日常の哀歓とかさなりあう物語たち。●2520円

名作映画に字幕をつけた男の生涯
字幕の名工
秘田余四郎（ひめだよしろう）とフランス映画
高三啓輔著

「第三の男」「天井桟敷の人々」など、七〇〇作に及ぶ映画に字幕をつけた放蕩無頼の男・秘田余四郎の生涯を、川喜多長政や高見順らの交友を中心に描く、もう一つの映画裏面史。●2520円